

女性のための情報誌

NETWORK

NO. 11



目次

知事巻頭インタビュー.....	2
特集 男女共同参加型社会をめざして...4	
◇一歩ふみだした人たち.....	6
◇そして これから.....	10
女性の声を県政に - 県婦人会議 -	12
ウーマン スクランブル.....	14
グループ紹介.....	16
国際交流のひろば.....	17
ねつとわあく らいぶらりい.....	18
ポプリ.....	19
婦人課だより、編集員紹介.....	20



静岡県

男女が共にになう

心豊かな社会を

佐竹 よろしくお願ひします。今年編集員も若返って、新生婦人課にふさわしい「ねっとわあく」を作ろうと、皆はりきっているのですが、十号までご覧になっての御意見、御感想をお聞かせ下さい。



知事 私は女性の年齢は気にしないことにしているんだが(笑)ねっとわあくを見て、良い編集をしていると思いますよ。無理に言えば少しハイカラすぎるかなと、もう少し庶民性を持たせた方が良いような気がするね。それと、私達の地位・環境というものを、もっとこうしたらいいなと、楽しい提言を引き出すようなものにしたらと感しましたよ。素人さんが作ったには大変立派な編集であるし、皆さんの前で開いても恥かしくない情報誌ですね。十一号という一区切りした新たなスタートですから皆さんの責任は重いということになるかな？

大高 私達も力を合せて、良いものを作っていくと思います。

私達は取材で色々な方にお会いする機会が多いのですが、知事さんは人と接する時には、どのような信条をお持ちですか？

知事 うーん、むずかしいね。信条というより、持って生まれたキャラクターというよりは根が明かるい方だから、明かるい雰囲気を保つような接し方を心掛けています。自分もまわりも社会も明かるくするという気持(信

念とまで言えるかどうか)……を持つているので、明かるい気持で感じのよいおつき合いをするよう心掛けています。家庭でも、職場でも、物事を明かるく受止めていくことが大切だね。

渥美 全国で十番目に単独課として婦人課を設置して下さったり、課長に女性を登用して下さるなど、知事さんは女性問題に大変に御理解のある方という印象があるのですが、その姿勢の原点となるものはどんなことでしょうか？

知事 私の年代の者は皆そうだと思うが、家庭というのは母親だね。特に私の場合、母親の姿をずっと見ていましたから。母親、女性というものは、社会的に男性と肩を並べるまでいなくても、少し外に出た方が良いのではないか、そういう発想を得たのだな。別にフェミニストという訳ではない。母親も不幸だと思っていた訳ではないが、とにかく朝から晩まで大家族の世話で忙しく、休む暇もなかった。それでもいつも明かるかったしね。物心ついてからだな、女性の地位というか、母親って大変だなあってわかったのは。それから私は兵隊に行きましたけど、ほとんど友人が戦死して、その残された子供達の家庭を知り、それで私は政治に携わり、「福祉をやる」ということを第一の政治使命としたわけですから、政治家として社会の流れを見ながら、女性問題には特に気を配って来ました。市政、国政、県政を経験して、静岡県の方々も全国的レベルまでやるべきだと考えて婦人課を作らせてもらったし、婦人の地位

向上・社会参加の促進も当然すすめてきたというところでしょいか。県議会の方々にも理解してもらえてできた事ですし。

婦人問題というのは、人間として当然のことが社会制度の上で遅れていたということですね。昔は女性は太陽だった。だから自然社会にもどっていきこうということだね。

野村 女性が社会参加する事により、その家庭が従来と違ったものになると思いますが、家庭には何が一番大切だとお考えでしょうか。

知事 女性が社会参加して一番困るのは男性（御主人）だと思う。長い性別役割分担意識の歴史から見ると、家事育児など、いっぺんに平等にやろうと思うと男性側に心構えがまだ出来ていない。不協和音が多いのは平等の歴史が浅いからだね。あせってやると無理が出てくるんだよ。外に出る事によって、役割分担で欠けたところが出てくるとして、それをどうカバーするかと言うと、それはやはり、両者の知恵で家庭からまず始めていくしかないと思う。男性が手伝う家庭もあれば、外に出た分頑張る奥さん一人でやる家庭もある。子供が分担してくれる家庭もある。一つの範疇に入る答はない訳で、長い歴史の中から違った新しい生活を創っていくのだから、夫・妻・子供それぞれが、家庭や家族に対する自分のあり様を考えて行動する。お互い「与える」「受容する」ということを考え、話し合い、気くばりをしていきたいね。自分達の生活は、その環境の中でよく咀嚼しながら創ることが大切だね。

寺田 女性は様々な悩みを持ちながら、社

会参加を考えていますが、そのような中で、女性としてどのような「心」を育てていったら良いのでしょうか？

知事 動物の母親は自分の生んだ赤ちゃんの汚物までもなめて、実に可愛がり、抱え込むようにして育てる。人間も含めて動物は生存本能でそういう事をやる訳ですが、その様な姿を我々は単に母性本能だと言うけれども、私はそこに「心」があるというふうに認識したい。心がなければ、あれ程の抱擁力や行為は起きてこない。だから、物事すべて、特に万物の

霊長だと言われた人間が、心を失くせば動物よりも劣る。心というのは反応がある。暖かい心で接すれば暖かい心が返ってくる。憎悪には憎悪しか返ってこない。顔立ちにまで心は現れてくるでしょう。女性も太陽や大地にな



ぞらえられるけど、その基になるものは心でなくてはならないですね。だから心を大切にしたいとつくづく思いますよ。また、心をみがくということも大切でね、自分の心をいつも平静に、明かるく保っていると、人の心の状態が見えてくる。自分の心も相手の心もお互いに反映していくから、無形の様で、有形の様で、一番大切なのは「心」ということになりませぬ。

私も三百六十万県民の皆さんすべてに会える訳ではないが、皆さんの心がわかってこなければ、よい静岡県づくりは出来ない、出来るだけ多くの人と会うように努力していますよ。

寺田 県下百八十六万人の女性の皆さんにねっとわあくを通して知事さんからメッセージをいただきたいのですが。

知事 県民の半分は女性ですから、これから女性が労働の場で、また地域社会で果す役割は益々大きくなっていくように思います。社会はゆるやかではありますが、確実に変わってきており、活動の場においても、皆さんが豊かな個性、お互いの心を大切にしながら、大局でまとまることが出来れば、それは大きなパワーとなつて、皆さんの地位の向上や幸せに結びついていくと思いますよ。社会の様々な場面で女性パワーが花ひらく為にネットワークを強くしていくことが大切ですね。皆さんの活躍を期待しています。

◇本当に激務といえるようなスケジュールの中で、快くインタビューに応じて下さった知事さん。私達の質問をウンウンとうなずきながら聞いて下さり、いつしか緊張もほぐれ、笑いと温かさに包まれたひとときでした。

社会をめざして

目を向けはじめました。価値観が多様化して、様々な生き方もあり少しずつ制度としても整ってきました。しかし本当に女性がところに横たわっており、それは男性のみならず、女性自身の中に強く

男かではなく、女であり人間でありうるために、もう一度自分の“意識”と向

特別寄稿

身中の虫

虫退治

吉永みち子

女性TVディレクターをしている友人がいるのだが、彼女、いつも颯爽・潑刺としていて、いかにも時代の先端を行くといったカッコよさを漂わせている。この業界も昨今、女性の進出が目ざましいらしいが、まだ数の上では圧倒的に多い男に混ざって約十年、仕事もいたって順調のようで、ますますカッコいいのである。

ところが、カッコいいはずの彼女からの久々の電話で待ち合わせをしてみると、どうもしおれて元気がない。何かミスでもしてかしたのかと思ったら、これが何と子供を産もうか産むまいかで悩んでいるのだという。

「もう三十二歳になるしね。仕事のこと考えると産休やら何やらで休まなくてはならないのがつらいし、その後のきつい生活状況を考えると、このまま夫婦だけの方がいいのかなと思うし。でも亭主の実家の目もこのごろ感じちゃ

うし……」

現場でのテキパキ歯切れのいい彼女からは想像もつかない、ため息連発の様子にびっくりしながらいつだったか女性管理職が過労で急死したという新聞記事を読んだ時と同じようなショックを感じた。

それはまた、私自身が男ばかりの職場で競馬記者として働き始めた頃とオーバーラップしてしまふ。女性初めとか、女性進出といわれつつ、あの頃は、私は女性であることをひっこめ、ひたすら男と同じ、男となることで生き延びようとしていたように思う。男と同じように、いやそれ以上にがんばっ



たのは、「女だけど女じゃない」と認めさせるためだったのではなかったかとの頃ふと青ざめる。「甘え」とみられたくないから、人の手は決して借りるまい。「やっぱり女はダメ」と思われたくないから、具合が悪くたつたて断固出勤する。休日出勤いとわず、有給もそっくり残るモータレツぶりで、家に帰れば女房役の母親に「メシ、フロ、ネル」である。女性が男性に委じて仕事をしたって、これは男女共存とは言えないだろう。

男女共同参加型

今日多くの婦人が職業を持ち、あるいは家庭の中のみとじこもらず、社会に可能になっているようにも見えます。女性の地位向上は国際的命題で活動しやすい時代に向かっているのでしょうか。障害は思いがけない根を張っている固定的な“性別役割分担意識”のようです。

吉永みち子さんはそれを“身中の虫”と呼んでいます。女かき合ってみたいものです。

能力を持ちながら、「体調が悪いから休む」の一言を飲みこんで命を削ってしまった人も、結局、どこか女であることの後ろめたさから逃れられなかったのだろうと思う。子供か仕事か、夫か仕事か、家庭か仕事か、健康か仕事かといった選択に女性が悩んでいる間はやはり本当の意味の女性進出とはいえないだろう。そして、私をさらに青ざめさせるのは、若さや独身や母親つきという恵まれた環境をいいことに、休日返上、残業どしどしと平気で男並をやっている仕事を得意とした当時の自分が、もしかしたら、必死でやりくりをつけてつつ仕事を続けてきた先輩女性の足をひっぱったのではないだろうかという痛みである。

AかBかという関係より、AもBもという関係がいい。それをハシと受けとめず、当然でしよと言えぬ方がずつといい。外見の女性が進出するのではなく、中味ごと女性が進出するのではないと、この手の悩みは際限なくくり返していきそう。

しかし、頭でわかっているも感情がついていかないことにはどうしようもないことで、仕事は上等家庭は二の次とか、仕事の条件は完璧な家事とかいう発想が、困っ

たことに女性の中にもこびりついていたりする。かくいう私も、仕事で参観日に行けなかったり、庭が雑草だらけ、玄関が泥だらけになると、同性の厳しいチェックの視線に怯え、メ切りの恐怖にも怯えつつ徹夜覚悟のヤケツパチの大清掃に励み、身心共に疲労困ぱいということ未だに時々やったりするから情ない。大体、人の目に怯えるということ自体、自分もその視点があるということではないかと思うと、身中の虫を見るような恐怖も走る。

近頃、男性陣も動き蜂から粗大ゴミへの命運を嘆き、そこからの脱却を考え始めるという機運が高まっているらしい。後退とか進出ではなく、男や女のフレイムをとりはらって考えないと、女は粗大ゴミどころか絞りがすになってしまつて、命がいくつあつても足りはしない。

友人の深刻な顔を思い出しつつ身中の虫をひとつまたつぶす。女性として大手をふつて仕事を続けるために……である。

吉永みち子さん

- | | | |
|-------|--|--|
| 1950年 | 埼玉県生まれ | 現在茨城県美浦村に住み、高三(長女)、高二(次女)、中二(長男)、五歳(次男)の母。 |
| 1972年 | 東京外国語大インドネシア語科卒業
競馬専門紙「勝馬」、その後「日刊ゲンダイ」の競馬記者 | エッセイストとして活躍。 |
| 1977年 | 吉永正人騎手と結婚 | 著書
「気がつけば騎手の女房」 草思社
(大宅壮一ノンフィクション賞) |
| 1978年 | 退社 | 「気がつけば30なかば」 文藝春秋 |

